

港区探訪



落語の町を歩いてみれば

そらいどうふ
第五話 鮒徳豆腐～芝・高輪・三田を歩く～

古典落語の中には港区を舞台とした噺が数多くあります。
さまざまな落語の世界を通じて、江戸から続く港区の歴史と今を訪ねてみましょう。

落語「鮒徳豆腐（そらいどうふ）」あらすじ

—— 豆腐屋の七兵衛が増上寺門前の貧乏長屋に行くと、貧乏学生が豆腐を注文し、食べたあとで金がないという。そして、明日まとめて払うといって、三日間食べ続けた。

聞くと、勉強して世の中を良くしたいというので、七兵衛は出世払いいいと、その後も差し入れを続けた。おからを好んだので、長屋では「おからの先生」と名が付いた。

ところが、七兵衛が風邪で寝込んでいるうちに、先生は「お灸が辛い」と言っていた。そのうち七兵衛も先生のことを忘れてしまった。

赤穂義士の討ち入りの翌日。七兵衛の豆腐屋の隣から火が出て、一帯が焼失。魚籃（ぎょらん）坂下の薪屋に避難していた七兵衛のもとに、大工の政五郎が訪ねてきて、ある人から頼まれた十両を受け取ってくれという。

七兵衛は、嬉しいが派出所がわからない金に手はつけられないと、神棚に上げておいた。

翌年、赤穂義士が切腹。町では切腹に反対する声が上がっていた。

ある日、政五郎が七兵衛を店の焼け跡に連れて行く。なんと店が建っていて、あのおから先生が現れた。増上寺の僧正様の口利きで、大老に引き会わされ仕官が叶ったという。

「赤穂義士の討ち入りで顔を出せませんでしたが、やっとお礼がきました」という先生。もちろん、見舞いの十両も新しい店も、先生が用意したもの。

長屋で「お灸が辛い」と聞いたのは、先生の名前「荻生鮒徳（おぎゅうそらい）」のことであった。

荻生鮒徳といえば、赤穂義士の切腹を言い出した学者。七兵衛はそんな人から受け取れないと突っぱねる。

しかし、鮒徳が熱心に武士の心を説いたおかげで七兵衛は納得し、すべてを受け取った。

切腹した赤穂義士も立派だが、先生も立派だと褒める七兵衛。私はただの豆腐好きの学者だと謙遜する鮒徳にひと言。

「この店をみればわかります。先生は私のために自腹を切ってくださいました」

お江戸の豆知識

荻生鮒徳ってどんな人？



荻生鮒徳は、江戸時代中期に活躍した大学者。

27歳の時に上総（千葉県）から江戸に出て、芝増上寺前で儒学を教え始めます。その後、徳川吉宗の元で享保の改革にも携わりました。

豪気な性格で、思想を周囲に酷評されても意に介さず、「煎り豆をかじりながら人の悪口を言うのが唯一の趣味」だったそう。死の際際、大雪が降る江戸を見て「この大人物が死のうとしているから天が雪を降らせたのだ」と大言壯語したとか。

こうした人柄からか、落語をはじめ講談、浪花節などにも登場します。

武士だけの名誉刑＝切腹



サムライといえばハラカリ、というのは海外でも知られていますが、各

国で広く読まれている新渡戸稻造の「武士道」でも、切腹は「洗練せられたる自殺」と紹介されています。

切腹は斬首刑と違い、死の際際であっても自分を律することができる武士だけに許された名誉刑でした。

主君への忠義を示したり、犯した罪を償つたりするため、「魂が宿る」とされていた腹を自ら切って意思を表したのです。

仇討を果たした赤穂浪士たちの処罰で幕閣の意見が揺れ動く中、鮒徳は忠義を尽くした武士の「魂」を尊重し、切腹を主張しました。



一. 増上寺前の桜川

二. 魚籃坂・長松寺

江戸に出てきたばかりの荻生徂徠が住んでいたのは、現在の芝の増上寺前です。増上寺への入口である大門付近は、かつては町家が多く並ぶ門前町でした。

この辺りには「桜川」と呼ばれた水路があり、近くの町家からの下水も流れていきました。

大門に程近い七軒町の下水は、長さ43間（約78m）、幅2尺（約60cm）だったそう。

大門周辺の4つの町では下水組合が結成され、組織的に下水の管理にあたっていました。



▲桜川のあった場所は、現在、道路になっています。



▲大門前の案内板には川が描かれています。

落語にも登場する「魚籃坂」は、三田4丁目と高輪1丁目の境にあります。

坂の途中にある魚籃寺の観音様が持つ魚籃（=ビク）が名の由来とされ、坂を上りきると伊皿子（いさらご）坂へとつながっていきます。

「魚籃坂下」交差点から、国道1号線を三田方面に少し進んだところにある「長松寺」には、荻生徂徠が眠っています。

長松寺の入口には、石柱が立ち、墓地には徂徠の墓のほか、徂徠の功績をたたえる説明板や荻生家代々の墓があります。



▲今も変わらず
坂の名前が残っています。



▲徂徎の墓石には、
「先生」と書かれています。

三. 泉岳寺

47人の赤穂義士が葬られている「泉岳寺」は、慶長17（1612）年に徳川家康によって外桜田（現在の千代田区永田町）に創建された寺。
寛永18（1641）年の火事で焼失しましたが、現在の場所に再建されました。
四十七士の墓のほかに、義士ゆかりの品を所蔵した記念館もあり、今多くの人々が参拝に訪れます。
毎年12月14日には義士祭が催されます。



監修：芝落語会会長 西田高光 参考文献：『江戸落語の舞台を歩く』河合昌次著／東京地図出版、『まち探訪ガイドブック』俵元昭監修／港区産業・地域振興支援部、『ニュース東京の下水道（No.221）』栗田彰著／東京都下水道局発行、『図説 大江戸さむらい百景』渡辺誠著／学習研究社、『大江戸まるわかり事典』大石学編／時事通信社、『荻生徂徠』野口武彦著／中央公論社、『忠臣蔵』野口武彦著／筑摩書房



中国語も堪能だった荻生徂徠は、江戸市中で西の方角に引っ越した際「これで憧れの中国に近づいた」とたいそう喜んだとか。また祖先が物部氏だったことから、自らを中国風に「物徂徠（ぶつそらい）」と名乗ることもありました。

▲このページのトップへ

| サイトマップ | みんなの声 | Kissポート財団について | 情報誌「Kissポート」について | 品質・環境への取り組み | 個人情報保護について [PDF] |

Kissポート財団

(公益財団法人港区スポーツふれあい文化健康財団)

港区赤坂4-18-13赤坂コムニティーブルガ

電話：03-5770-6837/Fax：03-5770-6884 お問い合わせ：fureai-info@kissport.or.jp



このホームページはKissポート財団の公式ホームページです。このホームページのすべての権利は当財団に帰属します。当財団の許可なく複製、転載は出来ません。